福祉啓発用シナリオ

助け合い劇場

住民流福祉総合研究所＜木原孝久＞

「助け合い劇場」上演のすすめ

このたび、一般住民向けの啓発用演劇のシナリオを作りました。テーマは２つ。１つは「助け合い」。もう１つは福祉活動への参加です。

演劇と言うほどのものではなく、要は出演者が語ることがすべて用意されたトーク番組のようなものです。

以前、本研究所では、支え合いマップづくりの啓発用の演劇シナリオを作成しましたが、これがなかなか好評で、特に社会福祉協議会のスタッフの中に演劇好きの人が多いことがわかりました。

ならばと、今度は助け合いや福祉参加についての啓発用のシナリオを作ってみました。セリフがかなり多いので、腰が引けてしまうかもしれませんが、ただ「助け合いをしましょう」というのではなく、「助け合う」とはどういうことなのかを深く考えていただく内容になっていますので、ぜひチャレンジしてみてください。寸劇シナリオと同じように、台本を読みながら上演していただく形でいいのです。

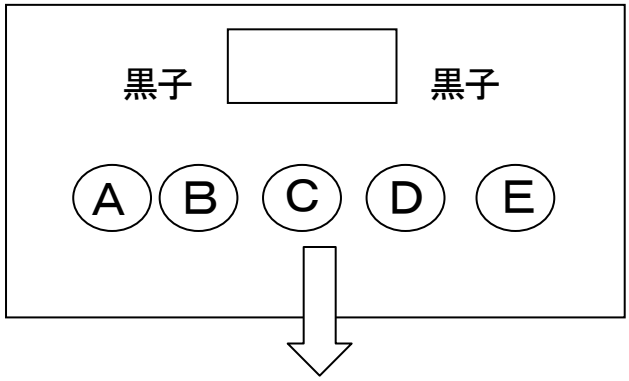
ご利用の条件については、原則として、内容そのものは変更せずにご利用いただきたいのですが、女性が演じる場合など、語尾は適宜変えていただいて結構です。また、内容や表現の仕方など、「こうしたらもっと分かりやすい」「こういう内容を加えたい」「第〇幕と第〇幕だけを使いたい」といった改善のアイデアがありましたら、どんどんお寄せいただき、より良いシナリオにしていければと思います。

どなたが上演されても自由ですが、本研究所にその旨、ご一報ください。
おそらく私たちもやってみようと手を挙げる社協などが出てくると思いますので、彼らに上演依頼をしたらどうでしょう。業務に支障のない範囲で「巡業」していただければと思います。

求められれば、レクチャーもしますので、ご希望の場合はご連絡ください。

助け合い劇場

＜シナリオ＞



①出演者　5人。この図のように舞台中央に一列に並ぶ。

②舞台の後方にテーブルを用意。そこに各種セットを置いておく。

③黒子が待機して、必要な物を出演者に手渡す。

＜第１幕＞棲み分け社会

A　この頃「助け合い」という言葉がはやってるね。なぜだろう。

D　政府も言っているよね。介護保険が行き詰ってきて、最近、要支援の人を地域に委ねることになったんだけど、それを住民の助け合いで何とかできないかというんだ。

C　でも住民は、介護保険ができてから、もう助け合いは要らないのかと思っちゃったところもあるよね。

D　そういえば、この頃ふれあいサロンも要介護者を仲間に入れなくなったみたいだね。

E　老人クラブだって同じだよ。

A　今の社会は、元気な人と弱った人が別々に集団を作って生きている。こういうのを「棲み分け」というのかもしれないけど、要介護になったら福祉施設にしか行かれないなんて、なんだか寂しいね。

D　といっても、そういう人を受け入れるのを渋る気持ちもわからないではないな。

C　認知症の人を受け入れた老人クラブは、旅行に行ってもその人が１人でどこかへ行ってしまったり、集合時間になってもなかなか帰って来なかったりするから、誰かがついていなくちゃいけないんだって。

D　たしかに手がかかるだろうし、その人のことでてんてこ舞いするのはよくわかるけど、それでも受け入れるのを「共生」、共に生きるって言うんじゃないのかな。

B　そういう大変な人を受け入れて、何とかうまくやっていこうと努力するということが、『助け合い』なのかもしれないね。

＜第２幕＞助け合いはしたくない「おつき合い」

（注）おつき合いの流儀（1枚）と、それを引っ繰り返したもの（5枚）を用意（両手を広げた程度の長さ）

A「助け合い」って、長いこと言われているけど、助け合いが実現しないから、いまだに言われ続けているんじゃないの？

B　そうかもしれないね。まずはここで、日本人のおつき合いのあり方について考えてみよう。（１枚の紙を広げて）これらの５つの文章について、みんなはどう思う？

今から私が読み上げるから、自分も当てはまると思う人は手を挙げてね。

１つ目。家族が認知症になったら、そのことを周りには言えない。どう？

全員　手を挙げる。

B　２つ目。人に迷惑をかけることは絶対にしたくない。

全員　手を挙げる。

B　これも全員だね。では３つ目。人のことを詮索するのはよくないし、私もやらない。

全員　手を挙げる。

B　４つ目。お節介はなるべくしたくない。

全員　手を挙げる。

B　プライバシーは絶対に守るべきだ。

全員　手を挙げる。

B　えっ、また、みんな？

C　しようがないよ、みんな同じ考えなんだから。

B　みんなに聞くけど、この５つに全部賛成だということは、どういうことだと思う？

E　さあ…そこまで考えて、手を挙げたわけじゃないから…

B　まず１番目。家族が認知症になっても周りに言えないとなると、そのことを誰も知らないのだから、助けようがないね。

A　確かにそうね。

B　次は、人に迷惑をかけることだけはしたくない。これは日本人の文化だよね。みんな絶対に守るはずだ。でもね、人に助けてくれと言えば、当然相手に迷惑がかかる。だから「助けて」とは言えない。これでは、助け合いは始まりようがないよね。

全員　なるほど。（納得顔）

B　次に行くよ。人のことを詮索するべきではない、とみんな思っているよね。でも、私たちは家で問題を抱えて困っていても、周りにはそれを隠してしまうから、ただの見守りでは相手の本当の状況はわからないんだ。だから虐待や孤独死などを防ぐには、相手を助けるために、周りが詮索することも必要なんだよ。

全員　うーん。

B　次は、お節介はしないということだけど、だれかを助けてあげたいと思っても、お節介だと思われるのが嫌で、つい我慢しちゃうということもあるよね。

全員　そうそう。

B　でも日本人って、困っても「助けて」と言えない人が多いから、誰かがお節介をしないと、そういう人は救えないんだ。

さて、最後は、プライバシーは絶対に守るべきだ、ということだけど。

E　それはそうでしょ。

B　でもね。これをざっくばらんに考えてみようか。たとえばAさん、私はあなたのプライバシーを尊重して、あなたのことは見ないようにしてあげるね。それに、あなたについて知っていることも誰にも言わないから、安心して。

でもそうなると、あなたが困っても、そのことを誰も知らないということになるよね？

A　まあ、そういうことになるね。

B　つまり、誰からも助けてもらえないわけだ。

A　えっ、そういうことなの？（悲しそうな顔をする）

B　プライバシーを尊重するということは、結果として、その人を助けないということになるんだ。

C　なるほど、プライバシーを尊重することと助け合いをすることは、正反対なんだ。

B　そう、助け合いはしないということなら、いくらでもプライバシーを尊重していいんだよ。

D　それなら民生委員の守秘義務というのも、守りすぎたら民生委員しかその人の状況を知らないから、その人は民生委員以外の人には助けてもらえないことになるね。

B　こうやって考えると、今の日本人のおつき合いの仕方では、助け合いはできないということなんだよ。

A　となると、この５つを引っ繰り返さなければ始まらないわけで、これが私たちの努力目標になるね。

B　じゃあ、みんなで１つずつ、おつき合いの流儀を引っ繰り返してみよう。みんな、書いたものはあるかい？

全員　あるよ。（舞台後方のテーブルから持ってくる）

B　みんなで一斉に上げてみよう。行くよ、せ～の！

全員　書いたものを一斉に上げる（以下の下線の部分のみ書いてある）。

C　１人ずつ、書いたものを読み上げよう。

A　私は認知症と言っちゃおう。

B　迷惑かけ上手になろう。

C　相手の困り事を知りたければ詮索しよう。

D　お節介が本当の思いやり。

E　助けてもらうためには、できるだけプライバシーをオープンにしよう。

＜第３幕＞助け合いは「助けて！」から始まる

（注）第3幕までに用意しておくもの。

①助け合いに関する2つのアンケート調査結果。

②助け合いの仕掛け人の仕掛けリスト（5枚・両手を広げた程度の広さ）

D　ところで、日本人はおつき合いの中で助け合いをする気はないようだけど、ならばどこで助け合いをしようというのかな？

A　普段のおつき合い以外に、私たちの生活の中にどんな営みがあるんだろう。

D　たとえば会社員は企業で働いている。主婦は趣味グループやスポーツグループに所属している。生協やＪＡもそうだし、ボランティアもしている。祖父母は老人クラブとか。

B　じゃあ、そういうグループや会社で助け合いをしているのかな？

E　していない人もいるけど、している人もいるね。

D　面白い人を知ってるよ。自分の老後のために、自分が所属しているグループ全部に助け合いを仕掛けているんだよ。そこに書いたものがあるから、１枚ずつ、持ってくれる？

（全員　舞台後方のテーブルから１枚ずつ持ってくる。それを前に向かって掲げる）。

A　「自宅でサロン」。定期的に開いていて、そこに民生委員も入れているんだって。

B　ご近所づき合い。旅行に行くと１０軒分のお土産を買って来る。風邪を引くとご近所さんがお見舞いに来たり。

C　配食ボランティア。自分がリーダーをしていて、助け合いを仕掛けている。

D　スイミングクラブ。ここでも助け合いを仕掛けている。

E　裁縫教室の先生をしていて、教え子はもう５００人を超えたらしい。こまめに面倒を見ているから、「先生に何かあったら、飛んでくるからね」と言われている。

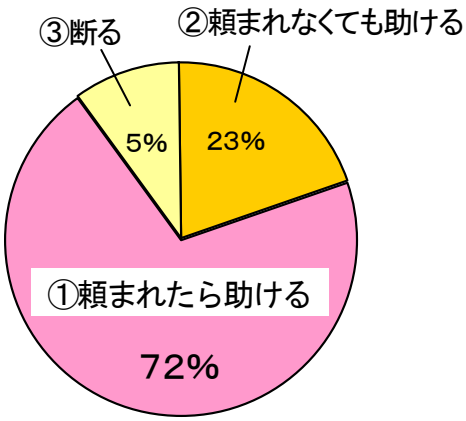
D　この人のやっていることに、助け合いが始まるヒントがありそうだね。

全員　そうだね。

E　ところで、助け合いは難しそうだけど、それでも助け合いが始まるためのカギになるようなものはないのかな？

A　こういうのはどう？（と言って、円グラフを持ち出す。）

足元で困った人がいたら？



全員　それは何？

D　長野県の須坂市が市民向けにアンケート調査をした、その結果なんだ。質問項目は、あなたの足元に困った人がいたらどうするか。答えは３つ。①頼まれなくても助ける。②頼まれたら助ける。③断る。さて、みんなはどうする？

B　妥当なのは「頼まれたら助ける」だよね。

D　じゃあ、結果を見てみよう。①頼まれなくても助ける、が２３パーセント。②頼まれたら助けるが７２％。③断るが５パーセント。

E　やっぱり、日本人は「頼まれたら助ける」が圧倒的に多いんだね！

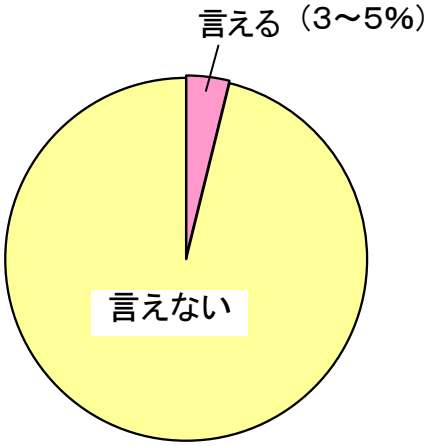
B　①と②を足すと９５パーセントになる。つまり日本人の大部分は、「人を助ける」と言っているんだ。

D　日本の福祉機関は、助け合いを始めるためには、みんなに思いやりの心を持ってもらうことが必要だと思っているんじゃないかな。

E　たしかに福祉センターに行くと、思いやりとか、愛とか、やさしさという言葉で溢れているよね。

D　しかし、数字を見ると、９５パーセントが「助ける」と言っている。今の段階で日本人は、もう十分にやさしいんだよ。それでは、助け合いが始まるために何が欠けているのかな？

E　そうか、わかった。７２％の人は「頼まれたら助ける」と言っているけど、困った時に人に助けを求められる人って、どのぐらいいるんだろう？



困ったとき「助けて！」と言えるか？

D　いい所に気づいたね。じつは、こういう調査結果があるんだ。「困った時、あなたは助けてと言えますか？」。「言える」という人は、どれぐらいだったと思う？

B　まあ、２割ってとこかな。

C　３割ぐらいいるんじゃない？

E　そんなにいるかな。私は１割だと思う。

D　残念でした。結果はこうでした。（と言って、もう１つのグラフを掲げる）。

全員　ええーっ！

C　３パーセントから５パーセント？　少ない！

D　日本人は、思いやりの心はあるんだけど、自分が困った時に『助けて』と言えないんだよね。だから、７２パーセントの人たちは、手の出しようがないわけだ。

A　じゃあ、どうすればいいんだろう？

D　だからみんなが、困った時に『助けて』と言えるようにすること。そうしたら助け合いが始まるんだ。

B　とにかく助けを求めれば、①と②を合わせて９５パーセントの人が助けてくれるんだから、じつは結構やさしい社会なんだね。

D　そこでわかったことは…　ちょっとＡさんとＥさんで、持ってきてくれる？

（ＡとＥが舞台後方から横断幕を持ってくる。それを２人で掲げる。「助け合いは『助けて！』から始まる」と書かれてある。

D　助け合いは『助けて！』から始まる、というわけです。（と言って、紙を指さす）「助け合いは思いやりから始まる」じゃなかったんだね。

E　でも、日本人はその『助けて！』が言えないんでしょ。

A　先ほど紹介した長野県須坂市では、助けられ上手さんを表彰していたよ。その表彰状に何て書いてあると思う？「助け合い推進貢献賞」だってさ。しかもその人を助けた

人も、同じく「助け合い推進貢献賞」なんだよ。

C　それは、どういうことなの？

A　つまり、助け合いというのは、助ける側と助けられる側の協働作業ということなんだ。人を助けることも福祉活動だけど、人に助けてもらうことも『助けられる』という福祉活動をしているということ。だから堂々と助けを求めていいということなんだよ。まあ、この辺りは、後で改めて考えてみよう。

＜休憩＞

＜第４幕＞担い手と受け手が協力してつくる福祉

（注）助けられ上手さんの依頼項目（5枚。両手を広げた程度の長さ）を用意。

A　みなさん、ここから「第４幕」になりますが、最近私たちが偶然知った、ある面白い事実をご紹介することから始めたいと思います。じつは私たちは、支え合いマップというものを作っていました。

D　支え合いマップとは、簡単に言えば、同じご近所の住民が集まって、住宅地図に住民のふれあいや助け合いの関係を線で結んでいくのです。そうすると、その地区の助け合いの実態が見えるようになるのです。

A　この作業をしていたら、高齢者夫婦の山本さんのことが出てきたわけだよね。

C　そうそう。山本さんご夫婦は、ご主人が要介護で車いすに乗っていて、奥さんが介護しているんだけど、私はよく、ご主人のお散歩の手伝いを頼まれていたんだ。

A　ところが、マップに山本さんと周囲の人たちとの関係を線で結んでいたら、頼まれていたのはＣさんだけじゃなかった。

C　そう。今日ここに集まった人たち、全員が奥さんに頼まれごとをしていたんだよね。

全員　うなずく。

A　それじゃ、みんな、自分が奥さんに頼まれたことを発表してね。

（全員　舞台後方から紙を取り出し、全員が頭上に掲げる）

A　私はね、家のお掃除を時々頼まれていた。

B　私は運転ができるから、ご主人の通院の送迎を頼まれた。

C　私はご主人の散歩の付き添いを頼まれた。

D　私は、介護でストレスが溜まっているからと、趣味グループに一緒に参加してほしいと頼まれた。

E　私は、ときどき話し相手になってほしいと頼まれた。

D　というわけで、マップを作っていたら、山本さん夫婦に、なんと、私たち全員が関わっていたことがわかったんだよね。

全員　うなずく。

B　奥さんに頼まれた時、みんな、どんな感じがした？　率直に言って、不愉快とか？

A　それが、そうじゃないんだよ。なんというか、これはやりやすいなと。要援護者の方から、これをしてほしい、あれをしてほしいと言ってもらえれば、こっちは相手に何をしてあげればいいか考えなくていいし、プライバシーの心配もないし。

C　たしかにそうだね。普通はボランティアの方が対象者の困り事を想像しなければならないけど、本人が自分の困り事をいちばんよく分かっているんだから、誰に何をしてほしいか指示してくれるとすごくやりやすいね。

C　それにご近所で知り合い同士だから、山本さんも、Ｂさんは車の運転ができるとか知っているから、誰に何を頼んだらいいのかもわかってる。

B　そうか！　つまり福祉の担い手ではなく、福祉の当事者が活動をリードするのが本当は自然なのかもしれないね。今はその逆だけど。

全員　うなずく。

A　今考えたんだけど、山本さんの奥さんがやっていることも立派な福祉活動かもしれ

ないね。

B　なるほど。自分が困った時に、誰にどんな支援をしてほしいかを考えて、お願いしているんだから、これなら担い手の方も助かるよね。つまり、当事者も自分の福祉に参加しているわけだ。

A　助け合いというと、助けたり助けられたりと考えるけど、担い手と受け手が、それぞれ自分の役割をしっかり果たすというのも、助け合いと言えるのかもしれないよ。

B　なるほど、面白いことを言うね。それでは、今わかったことをまとめてみようか？

（Ａさんと Ｅさんが、舞台後方に行って横断幕を持ってくる。「担い手と受け手が協力して作る福祉」と書いてある）。

A　こういうことだね。だから、福祉というのは、担い手だけで勝手に考えることではなく、受け手と一緒に考え、一緒に取り組むのが正しいあり方かもしれないね。

A　なんか面白くなってきたね。

全員　うんうん。

＜第５幕＞それぞれにとっての福祉参加

（注）第5幕が始まる前に聴衆には、「私の福祉活動記入表」を手渡しておく。

E　先ほど話したことは、別な言い方をすると、それぞれの福祉参加なんだ。担い手だけが福祉活動に参加できるのではなく、当事者もまた、自分の福祉課題を解決するために積極的に行動すれば、それが当事者の福祉参加になると考えたらどうかな。

C　そうか。福祉参加にも、いろいろなあり方があるんだ。

A　そういえば、「あなたは福祉活動に参加していますか？」という調査がよくあるけど、あれは答えにくいよ。

B　そうそう。「あなたはボランティアグループに参加していますか？」と聞かれているように聞こえる。それなら「していない」と答えるよりしようがない。

A　でも、ボランティアグループに所属していなくても、福祉活動はできるもんね。隣のおばあちゃんにおかずをおすそわけするのだって、立派な福祉活動だよ。

E　うん。山本さんのように、見方によっては、当事者でも福祉に参加できるわけだし。

A　そう考えると、実際に福祉活動に参加している人は、一挙に何倍にも膨れ上がるね。

E　私の近所に住んでいる高齢で一人暮らしの女性が、最近認知症になったんだけど、周りの人を自宅に招待してサロンを開いているんだ。私もその参加者の１人なんだけど。

D　認知症の人がサロンを主宰しているの？ すごいね。どういう人が集まっているの？

E　みんな、近所の普通の人たち。参加の動機はといえば、まあ私の場合は見守りがてら。

D　じゃあ、どっちが活動しているのかわからないね。一人暮らしの人はサロン開催というボランティアで、参加している人は、その主催者の見守りボランティア。

E　それでいいんだよね。わざわざボランティアなんて言う必要もない。日常生活をしながら、その中で福祉的な活動をすればいいんだよね。

B　こんな話があったよ。コンビニに、奇妙な女性客が毎日来るんだって。すごい厚化粧をしていて、顔は真っ白。それに真っ赤な口紅をつけているから、みんな気味悪がっていた。でも、店員は彼女がＤＶの被害者だと気づいたんだ。殴られてできたあざを隠すための厚化粧だったわけだ。それで、尻込みする女性を諦めずに説得し続けて、警察に連れて行き、おかげで女性は救われたんだって。

E　そうか。自分の生活や業務の接点で出会った相手にかかわっていけばいいんだ。

A　接点での活動といえば、知り合いの小学生の子も、そういうことをしているよ。その子はね、朝、通学班の仲間が来るまでの間に、近くの一人暮らしの高齢者を訪ねて、「ゴミ出しはありませんか？」と声をかけているんだ。学校帰りも、ストレートには家

へ帰ってこない。通学路にある一人暮らしの高齢者宅に寄って、お茶を飲んでくるらしいよ。

E　すごい子がいるんだね。たしかに、接点での活動と言えるね。

B　公務員は業務そのものが福祉的だから、いまさら福祉参加と言うのもおかしいけど、こんな事例はどう？ 医療相談室の人から聞いたんだけど、勤務している病院に末期のガン患者が来たんだて。もう手の施しようがないので、どうせなら家で死にたいと、自宅に帰ることにした。しかし、車椅子もない、電動ベッドもない。中年の女性なので、高齢者ではないし、障害者手帳も持っていないから、サービスも受けられない。そこで、懇意にしている役場の担当者に「何とかしてもらえないか」と頼み込んだら、驚いたことに、そのワーカーは彼女の願いを全部聞き届けてくれたんだ。

E　でもね、福祉用具の貸し出しにしても、規定というものがあるはずでしょ？

B　そうなんだよ。でもね、その担当者によれば、こういうことなんだ。「規定には必ず、最後にこう書いてある。『その他、市長がよしと認めたもの」と』。つまりこの担当者は、サービスが必要だけど規定に当てはまらないケースに出くわすと、市長になり代わって「よし！」と言っちゃうわけだ。

E　そういうのを、「粋な計らい」と言うんだよね。業務の枠から一歩踏み出して人を助けているのだから、これも福祉活動と言える。公務員にも、本業中のボランティアがありうるんだね。

C　こんな話もあるよ。ボランティア講座で、受講生の１人がこう言った。「私は舅と姑の２人の介護を２０年間、続けてきました。その間、ボランティアをしたいと思っても介護で忙しくてできなくて、ボランティアできない自分を日々責めていました。でも最近、２人とも亡くなり、ようやくボランティア講座に来れました」と。

E　それって、なんか変じゃない？ 私なら、「あなたは２０年間、ボランティアをやっていたんですよ」と言ってあげたい。

C　その時、講師も同じことを言ったそうだよ。そしたら、「先生のその一言で、私の２０年間が救われました」と涙を流したらしい。

E　うんうん、わかる。

C　家庭での介護だって、立派な福祉活動と言うべきだよね。「介護の社会化」という言葉があるけど、これは本来、家庭での介護も社会活動として認知するということなんだ。重度の要介護者を２人も介護しているのなら、彼女の家はさしずめ「特別養護老人ホーム」で、彼女が園長だと言ってもいいよね。

E　その介護を近隣の人に手伝ってもらったり、近所の介護者を手伝ったりすれば、もっと園長らしくなる。

C　ここまでのことを整理してみよう。福祉活動にはいろいろあるということを話し合ったね。どんな活動があったか、振り返ってみよう。

（全員　それぞれ、自分の紙を持ってくる）。

C　それじゃ、一斉に上げてみて。

A　（高くかかげた自分の紙を読み上げる）「小学生が通学時に近所のゴミ出し」。

B　「コンビニ店員が店に来るＤＶ被害者を救済」。

C　「家庭で介護活動」。

D　「当事者の助けられ活動」

E　「公務員の粋な計らい」。

C　あ、さっきの認知症の人がご近所さんを集めてサロンを開くのも、当然、福祉活動だよね。（Ｃさんが、もう１枚の紙を持ってきて掲げる）。「ご近所活動」。

E　おかずのおすそ分けとか、ゴミ出しの手伝いなんかもそれに当たるね。ご近所活動も福祉となれば、みんなも何らかの活動をご近所でしているんじゃない？

全員　うなずいて「うん」。

C　さっき、「あなたは福祉活動に参加していますか？」という調査の話があったけど、

それは施設やボランティアセンターへ行ってするような、いわゆるボランティア活動のことであって、（手に持った紙を示しながら）これらの活動は、福祉活動として認められていないんだよね。

B　うん。でも福祉施設に行ってする活動だけが福祉活動なんておかしいし、それではいつまでたっても一部の人しか福祉に参加できないんじゃないかな。

C　見方を変えれば、本当は誰でも、何らかの活動をしているはずだよね。福祉とは直接関係のない職場とか、ご近所とか、家庭とか、趣味グループとか、学校などでも福祉活動は行われているんだ。

一つ一つの活動は小さくも、じつは大事なもので、それをもっと増やしていけば、すごく大きな力になるはずだよ。

C　（会場に向かって）皆さんの場合はいかがでしょうか？ 先程お渡しした記入表を持ち帰って、自分はどんな福祉活動をしているか振り返り、記入してみたらいかがでしょうか。

C　ではこれで「助け合い劇場」を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

全員（黒子も）　（聴衆に向かって頭を下げる）